

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00848

研究課題名（和文）帝国経験のリアリティを伝える歴史学の模索

研究課題名（英文）The Reality of the Imperial Experience and Historiography

研究代表者

加藤 圭木（KATO, Keiki）

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授

研究者番号：40732368

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近代日本の帝国経験のリアリティを伝えることができる歴史研究のあり方を模索するとともに、そうした課題に応える歴史教育の方法を開発することである。そのために、第一に、人びとが暮らした場である地域社会の歴史を解明する作業を進めてきた。その際、公害や軍事基地建設の問題などをとりあげた。その成果を加藤圭木『紙に描いた「日の丸」 足下から見る朝鮮支配』（岩波書店、2021年）などにまとめた。第二に、学生とともに市民向けの近代日朝関係史入門書を3冊制作し、それを市民社会に普及する取り組みを進めた。さらに、そうした学生との共同実践の意義について論文やシンポジウムを通して発信することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、前述の『紙に描いた「日の丸」』や3冊の入門書、さらには市民向けのセミナーの開催などの形で社会に還元することができた。『紙に描いた「日の丸」』では、実証研究の成果を踏まえつつ、地域や人びとの視点を重視し、下から植民地支配の歴史を描き出すことができた。また、3冊の入門書は、多くの読者を獲得し、大きな話題を呼んだ。帝国経験のリアリティを伝えることを目的とした本研究の成果が端的に現れたと評価することができるだろう。また、入門書制作の過程で、歴史研究・教育のあり方について議論を深めることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore ways in which historical research can convey the reality of the imperial experience of modern Japan, and to develop methods of historical education that respond to such challenges. To this end, first, we have been working to elucidate the history of local communities, the places where people lived. In doing so, we have taken up issues such as pollution and the construction of military bases. The results of this work have been compiled in books such as Keiki Kato's "Kami ni egaita Hinomaru" (Iwanami Shoten, 2021). Second, together with students, we produced three introductory books on the history of modern Japan-DPRK relations for the general public and worked to disseminate them to civil society. Furthermore, we were able to communicate the significance of such joint practice with students through articles and symposiums.

研究分野：歴史学

キーワード：帝国 地域社会 歴史実践 パブリックヒストリー 朝鮮 植民地 市民社会

1．研究開始当初の背景

朝鮮半島や中国など東アジアと日本の間には、近代の戦争・植民地支配をめぐって葛藤が生じている。戦後 75 年以上が経過し、世代交代が進む中で、歴史が今日も重大な問題として扱われていることは、日本社会、特に若い世代においては理解しがたくなってきている。戦争や植民地支配を論じることが、今日に生きる自分たちにとってどのような意味を持つのかが見えにくくなっているばかりでなく、歴史研究の側もその点を十分には伝えきれていない。帝国経験のリアリティを伝えることができる歴史研究・教育の方法を開発すべきである。

歴史研究の基礎に緻密な実証があることは言うまでも無いが、歴史を学ぶ意味をさらにわかりやすく提示するとともに、「歴史を伝える」方法を豊富化していく必要がある。情報が錯綜し、一面的な議論が幅をきかせている歴史認識の問題をめぐっては、こうした作業の重要性がますます増しているように思われる。

その上で、本研究が重視したのは地域社会の視点である。地域社会という場に、いかに帝国の経験が折り込まれているのかを明らかにし、それを叙述・教材化していくことにした。その際、開発主義に注目した。

2．研究の目的

本研究の目的は、近代日本の帝国経験のリアリティを伝えることができる歴史研究のあり方を模索し、そうした課題に応える歴史教育の方法を開発することである。ここでいう歴史教育とは、広義のもので、歴史叙述や教材開発、市民向け講座などを含むものとする。本研究では、実証研究と歴史教育・歴史叙述論の深化を車の両輪とし、学生や市民にどう教えるのかという観点から実証研究の方法や課題を再検討するとともに、最新の研究成果である地域社会史と開発主義をめぐる議論を、学生や市民の今日的な問いと接合させていく。

3．研究の方法

(1) 人々が生きた場である地域社会の視点に即して、歴史研究を発展させ、歴史叙述に生かしていく。

(2) 学生とともに近代日朝関係史の入門書を制作するとともに、市民向け講座を開催し、歴史教育や歴史実践の方法論について検討を深める。

4．研究成果

(1) 地域社会史研究

植民地朝鮮の地域社会史研究の成果を踏まえて、加藤圭木『紙に描いた「日の丸」 足下から見る朝鮮支配』（岩波書店、2021 年）を刊行することができた。同書には、「軍事基地建設と地域社会」「公害と植民地支配」「植民地支配と越境する人びと」「同化政策と地域社会」などの本研究課題に基づく成果を盛り込むことができた。関連して、ソウル大学国史学科より招請を受け、前掲『紙に描いた「日の丸」』に関してオンラインで講演を行った。

日露戦争下の朝鮮の地域社会の経験に関して考察を深めることができた。特に日本による土地収用政策と地域社会の関係に注目し、その成果を加藤圭木「朝鮮植民地化過程における軍用地収用：鎮海湾一帯を対象として」(『大原社会問題研究所雑誌』第 764 号、2022 年)として公刊することができた。

植民地期朝鮮の地域社会史研究の一貫として 1930 年代の朝鮮の漁村を中心に明らかにする作業を進めた。その成果は加藤圭木「横山喜太郎と朝鮮漁民 永興湾の力キ養殖をめぐって」(『植

民地朝鮮に生きた日本人』世織書房、2024 年）として刊行される予定である。

植民地朝鮮における性搾取と地方税制度の関係について研究を進め、その成果をソウル大学校奎章閣韓国国学研究センターコロキウムにて報告した。

地域社会の側から帝国経験を考えていく新たな方法を模索するために、沖縄における朝鮮人の歴史についてインタビューや現地調査をおこなった。

（２）歴史教育・歴史実践

加藤圭木監修、一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール編『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』（大月書店、2021 年）を刊行することができた。この本を通じて、日本の帝国経験について市民や学生に関心を持ってもらうとともに、わかりやすく歴史の事実を提示する方法についての研究成果を示すことができた。

『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』に関して、市民向けの公開セミナーをオンラインで3 度開催することができた。本書の意義や、日本の帝国経験を伝え考えることの意義を社会的に発信することができた。このシンポジウムは、のべ 1000 名を超える市民が視聴し、貴重な成果をあげることができた。これ以外にも外部団体の依頼を受けて、研究代表者や本書執筆者である研究協力者がシンポジウム等に登壇することができた。

ソウル大学校東亜文化研究所の招請を受けて、同研究所主催のオンラインシンポジウムにおいて研究協力者が『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』について報告し、韓国側のコメントーターから貴重なアドバイスを得ることができた。

『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』の成果と意義について、研究代表者が『世界』（第 961 号、2022 年）や『女性・戦争・人権』（第 22 号、2024 年）に論考を寄稿した他、日本学術会議公開シンポジウム「歴史学が開く未来」などで同書の実践に関する報告を行った。さらに、韓国のソウル市立大学国史学科ならびに翰林大学日本学研究所より招請を受けて、同書に関する報告を行った。

『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』の朝鮮語版として、加藤圭木監修、一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール編『わたしたちが知らないことは悲しみになります』（韓国・ハッピーブックストウーユー、2024 年）を刊行した。

『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』の続編として加藤圭木監修、朝倉希実加ほか編『ひろがる「日韓」のモヤモヤとわたしたち』（大月書店、2023 年）を刊行した。歴史を学び、その成果を社会に還元していく実践のあり方についてさらに深く検討し、その成果を反映させることができた。さらに同書には、韓国での現地調査の成果に加え、前述した沖縄での調査の成果を盛り込むことができた。同書に関しても、市民向けの公開講座を開催することができた。

加藤圭木監修、一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール編『大学生が推す 深掘りソウルガイド』（大月書店、2024 年）を刊行することができた。帝国経験を伝える新たな方法として、旅行ガイドブックの形式をとった入門書である。同書に関しても、市民向けシンポジウムを開催することができた。

高等学校の「歴史総合」教科書の朝鮮植民地支配記述について検討し、その成果を韓国で発表し、韓国の学術誌において公刊することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 加藤 圭木	4. 巻 764
2. 論文標題 朝鮮植民地化過程における軍用地収用：鎮海湾一帯を対象として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大原社会問題研究所雑誌 = Journal of Ohara Institute for Social Research	6. 最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15002/00025809	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤圭木	4. 巻 961
2. 論文標題 「日韓歴史問題」と大学生：モヤモヤは進化する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 183-191
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤圭木	4. 巻 90
2. 論文標題 日本の高等学校歴史教科書に現れた朝鮮植民地支配関連記述とその特徴：「歴史総合」を中心に（朝鮮語）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 韓国史学報（韓国）	6. 最初と最後の頁 99-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤圭木	4. 巻 101
2. 論文標題 日本軍「慰安婦」問題と向き合うために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊セクシュアリティ	6. 最初と最後の頁 26-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 加藤圭木	4．巻 22
2．論文標題 大学生とともに日本軍「慰安婦」問題を学ぶ：『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』の軌跡	5．発行年 2024年
3．雑誌名 女性・戦争・人権	6．最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 7件／うち国際学会 5件）

1．発表者名 加藤圭木
2．発表標題 日本の高校歴史教科書における朝鮮植民地支配記述とその特徴：「歴史総合」を中心に
3．学会等名 韓日学者たちが診断する日本教科書の韓国史記述（主催：韓国・東北亜歴史財団）（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 加藤圭木
2．発表標題 日本の歴史認識の現況と植民地支配研究：『紙に描いた「日の丸」』（朝鮮語での発表）
3．学会等名 第72回ソウル大学国史学科 BK21韓国学コロキウム（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 加藤圭木
2．発表標題 大学生とともに日本軍「慰安婦」問題を学ぶ：『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』の軌跡
3．学会等名 2022年度「女性・戦争・人権」学会大会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 加藤圭木
2．発表標題 日本の歴史認識と大学生がつくった日韓関係入門書（朝鮮語での発表）
3．学会等名 韓国・ソウル市立大学校2021人文大学校名士招請講演（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 加藤圭木
2．発表標題 大学生が向き合う加害の歴史 『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』を刊行して
3．学会等名 第19回「歴史認識と東アジアの平和」フォーラム・北京会議（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 朝倉希実加, 李相眞, 牛木未来, 沖田まい, 熊野功英
2．発表標題 日本の植民地支配認識の現実と課題 『「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし』を刊行して（朝鮮語での発表）
3．学会等名 ソウル大学校東亜文化研究所主催シンポジウム「アジアの声」（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 加藤圭木
2．発表標題 「紛争化」を超える歴史認識 学生・市民とともに朝鮮植民地支配を考える
3．学会等名 日本学術会議公開シンポジウム「歴史学が開く未来」（招待講演）
4．発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1．著者名 加藤 圭木	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 244
3．書名 紙に描いた「日の丸」 足下から見る朝鮮支配	

1．著者名 加藤 圭木（監修）、一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール	4．発行年 2021年
2．出版社 大月書店	5．総ページ数 184
3．書名 「日韓」のモヤモヤと大学生のわたし	

1．著者名 加藤圭木監修、朝倉希実加・李相眞・牛木未来・沖田まい・熊野功英編	4．発行年 2023年
2．出版社 大月書店	5．総ページ数 240
3．書名 ひろがる「日韓」のモヤモヤとわたしたち	

1．著者名 加藤圭木監修、一橋大学社会学部加藤圭木ゼミナール編	4．発行年 2024年
2．出版社 大月書店	5．総ページ数 176
3．書名 大学生が推す 深掘りソウルガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------